



<連載95>

クルーズ船 「シーボーン・プライド」初来日



大阪府立大学海洋システム工学科教授

池田良穂

クルーズ客船の中でも最高級クルーズ客船として評判の「シーボーン・プライド」が5月に初来日し、その優雅な姿を現わした。同船は、1988年にドイツで建造され、総トン数9,975トン。旅客定員212名に対し、乗組員が149名という、いたれりつくせりのサービスを売物にした客船であり、姉妹船「シーボーン・スピリット」とともにワールドワイドなクルーズ事業を展開している。キャビンはすべて高級キャビンであり、一日当たりの船賃は約11万円から。最近の大衆化されたクルーズの料金に比べると5倍以上の価格設定がなされている。船員はノルウェー人を中心として、ほとんどが白人であり、ノーチップ制としていることから、運航費に占める人件費の占める割合がかなり高くなっているものと思われ、これが前述の高船賃にせざるを得ない一因でもある。また、こうした超高級船は、消席率も50～

60%が一般的であり、これも船賃を押し上げることとなっている。

さて、「シーボーン・プライド」の船主は、ノルウェーのシーボーン・クルーズ・ラインであり、当初は3隻の同型船を建造しての事業展開を計画していたが、3隻目は完成前にロイヤル・バイキング・ラインに譲っている。しかし、ロイヤル・バイキング・ラインが親会社の経営不振からキュナード社に売却された折りに買い戻され、近々当初の計画通りの3隻のクルーズ客船による事業展開が図られる予定である。

しかし、シーボーン社の経営もすべて順調にいったわけではない。事業の立ち上がり時期には、集客も思わしくなくて苦戦し、その折りにアメリカの大衆クルーズ客船運航会社の最大手のカーニバル・クルーズ・ラインの傘下に入った。カーニバル・クルーズ・ラインは、本体の大衆クルーズ事



業を中心にしながらも、いろいろなグレードのクルーズ事業の展開を図っており、それらはすべて既存のクルーズ会社を買収して、それぞれの会社は従来通りのブランドのままの営業を行うという手法をとっている。カーニバル傘下には、伝統を誇るホランド・アメリカ・ライン、帆装クルーズ客船を運航するウィンドスター・クルージズ、超高級クルーズを展開するシーボーンと、クルーズマーケットのトップからボトムまでの商品を品揃えして、多様な乗客の志向に応えることのできる体制を作っている。最近も、カーニバルは盛んにクルーズ会社の買収に乗り出しており、それも北米市場に限らなくなりつつあり、グループとして世界的なクルーズ事業展開を図ることを目指しているようだ。

話し を「シーボーン・スピリット」に戻すことにしよう。大阪港に入港した同船を訪問し、同社のセールス・マネジャーと昼食を取りながら話す機会に恵まれた。

トラップを挙がって船内に入る。7万総トン級のクルーズ客船を見慣れた目には、やや狭苦しい印象があるが、内装にはさすがにお金をかけているらしく高級感が溢れている。しばらく船内にいると、狭苦しい印象はなくなり、しだいに落ち着いた感じになってくる。同船が、比較的高年者に好まれることがよく分る。ショーなどもあまり派手なものを行わないようだ。

レストランも、高級感が溢れ、サービスもエレガントである。セールス・マネジャー氏からは、同社の実績、今後の展開など幅広い情報を得ることができた。旅客定員の少ないクルーズ客船にとって好業績を挙げることはなかなか難しい。そのため、船の数を増やしてスケールメリットを出すことが考えられ、同社もようやく3隻体制となる。「理想の船の数は？」という質問には、「4隻」という答えが返って来た。4隻以上になると、やや多過ぎて「超高級感」というイメージを崩す可能性があると考えているようだった。